市の補助金活用し

銀座通商店街の空き店舗入居

野口さんたちプロジェクトのメンバーは集積地として空き店舗が増えている銀座通商店街に着目。商店街と協力し「まちなかシリコンバレー構想」をまとめ、大牟田市の街づくり基金事業に補助を申請。年末の先月二十七日に認定を受けた。今後は銀座通商店街の空き店舗に入居しサロン事業とIT系企業誘致に取り組む。

提案する街づくり事業審査員会

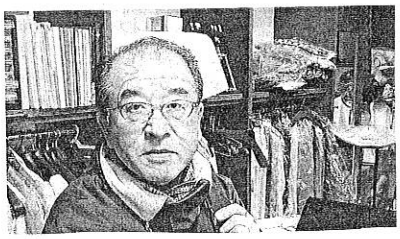
交通の利便性の良さに着目

野口さんたちは、大牟田の潜在的可能性として日本一の産炭地そして日本初の石炭化学コンビナートとして栄えた実績、高齢化率が三一・六%と高いことを逆手にとり「お年寄りが長い間に蓄えた知識があること」、そして三池港、有明海沿岸道路、九州新幹線、JR鹿児島本線、西鉄天神大牟田線など交通インフラが整っていることに着目。

大牟田の中心地区が活性化するために、商店街に人の流れを取り戻す「交流サロン」と新規事業、雇用を生み出す創造の場としてIT企業誘致のための拠点整備に取り組む。

具体的には銀座通商店街の空店舗を借りて、一階部分は異業種、異年齢間交流による事業の必要性を発掘する勉強会、交流会や高齢者を招いて知の伝承を図る講演会、若者の起業家育成教育などのサロン事業を行う。

二階部分はIT企業の誘致や野口さんたちの「ASKプロジェクト」の拠点として活用。ソフト(アプリ)の研究開発などに取り組む。



賑わう商店街復活へ

やっとスタートライン

野口さんから相談を受けた、銀座通商店街の光山一生副理事長は「昔にぎわった商店街はモノと情報の交換の場でした。技術革命が進み、テレビショッピング、そしてインターネットのサイトを使ったインターネットショッピングなどが主流となり、お客さんは家庭でも購入できるようになり、商店街に来る理由がなくなったのも衰退の一因。ただインターネット販売は個店では対応できますが、商店街単位では難しいのが現状。商店街とインターネットは相反する存在ではないかと考えていました」と振り返った。

「ただ、アドバイスしている石川先生や野口さんの大牟田への思い、情熱を話し合うたびに感じてきて、一緒に取り組もうと構想を練ってきました。まちづくり基金の補助申請も商業者と高専だけでなく行政も加わった三者が一致して取り組んでいけるきっかけになればと申請し、認めて頂きました。やっとスタートラインに立つことができました」と光山さん。

光山さんは「野口さんたちの世代が銀座通に松屋デパートがあった時代を子どもながらも覚えている最後の世代。商業での活性化ではなく、自分たちの学んできたものを町の活性化に活かせないかと真剣に考えておられることが、話をしていると感じます。商店街も変化を求められていますが、やはり若い世代が街に来てもらう仕掛けづくりがないと活性化しません。これから野口さんたちの活動で商店街が、どう変わっていくのか想像できませんが、新しい何かが起きるだろうと思います。今年はワクワクした気持ちで協力していきます」と語った。

相乗効果に期待

新しい可能性も生まれる

野口さんも「私たち電子情報工学系の学生や研究者だけでなく、有明高専のほかの学科の研究者や学生が集まるようになれば、私たちをターゲットにした業種が商店街に出店しようとプラスの効果も期待できます。私たちが街で活動することによって、新しい可能性が生まれ、町が賑やかになるように頑張ります」と話した。